

希望を耕す

土木と建築

東京大学教授・建築学

松村秀一

Shuichi Matsumura

お隣の土木さん

私は建築界の人間。一方本誌は土木界の方々にも広く読まれている。これまでこのことあまり頓着することはなかったが、いつだったか、土木一筋でやってきた高校時代からの友人に「松村の書いている連載を読んだけど、やっぱり建築さんの考えていることは難しくてよくわからなかったよ」と言われたことがある。連載もすぐに終わるので、今さら気にしても仕方ないと思っていたが、連載がもうしばらく続くということになったので、急に土木界の読者諸氏のことが気になってきた。

大学でも土木はお隣さんである。工学部の中では「建設系」という名のもと一括りにされることも多いので、何かとお付き合いはあるし、個人的には、建設系共同の大規模な研究・教育プロジェクトの幹事役を一〇年程務めていたので、土木の先生方に親しくお付き合いいただいたほうだと思う。だから、二つの世界の相違点と共通点は概ねわかつているつもりでいた。しかし、改めて言語化する機会もなかったため、言ってみれば直感的な理解にすぎない。

発注者責任という考え方

そんな中、昨秋、土木学会と建築学会の間でりがちであった。そのためか、発注者の責任というところまで議論が及ぶのは稀だ。例えば、地域空間の中で建物を造ること自体についての発注者責任はどうだろうか。多くの建物は私有財であるが、その所有者以外の多くの人の生活環境の一部でもあり、世代を超えて存在し続ける可能性も高い。だから、好むと好まざるとにかかわらず、建築は多くの土木構造物と同様に公共財的な性格を帯びる。どこにどんな建物を造るかはその地域社会にとってとても大事なことである。個々の建築工事の発注者には相応に大きな責任がある。

識においても、受注者側が圧倒的な優位にあるという現実を前提にした時、受注者側の良いようにやられてしまうのではないかと懸念が生ずる。だから、発注者側の情報や知識を補う何らかの有効な仕組みが求められる。建築における設計／施工分離の議論は、ここにこそ根差している。つまり、設計者は建築工事の発注者側に立ち、情報も知識も十分には持っていない発注者の代わりに、専門的な立場から施工者を指導・監督する。これは情報の非対称性を解消する一つの有効な手段になり得るので、設計と施工は別の組織が担当すべきだといふのである。

どこに何を造るかを決めるのは誰か

一方、日本社会には、かつての旦那と出入りの職人の関係に通じる発注者と受注者の継続的な主従関係と、そこで育まれる信頼関係も少なからず存在している。そしてその場合には、受注者が発注者の不利益に繋がることをするはずがないという認識が成立する。これがより伝統的な設計施工一貫という形に根柢を与えている。

神の見えざる手との付き合い方

このように建築界では、発注者側と受注者側の保有する情報が非対称である中、いかにして発注者の利益を守るのか、そのことに議論が偏る。しかし、民間の建築工事自体、それを成り立たせる土地、資金ともに私権の範囲に属し、私

恒例になっている二学会会長・副会長会議という場に出る機会があった。双方の相違点と共通点を理解するには良い機会になっていた。その会で土木学会の大石会長が言われた一言がとても印象に残った。「発注者責任」という言葉である。大石会長の言われた「発注者責任」は、技術開発を導く責任や建設行為による公共の利益の増進に対する責任等、含意するところが大きかったが、ここに土木と建築の大きな違いの一つがあることを改めて強く認識させられた。

よく言われるように、土木では公共事業が中心だが、建築では民間事業が大半を占める。このことは私も認識している。しかし、ここから一歩踏み込んだ時に初めて、発注者の責任に対する考え方が大きく違ってくることに思い至る。読者諸氏には釈迦に説法かもしれないが、私自身に関して言えば、これまでこのことを明確に意識する機会も必要もなかった。だから、大石会長の発注者責任に関する話が響いたのである。

情報の非対称性

民間事業主体の建築分野では、それが個人であれ組織であれ、建築の専門知識を十分に持っている発注者は多くない。だからこそ、建築分野では「情報の非対称性」という市場の欠陥がよく話題になる。保有する情報量においてもそこに公共的な観点から発注者責任を求めてみても暖簾に腕押し、神の見えざる手に任せれば良いという考え方が立ちほだかる。

土木分野では公共事業が多く、また公共の発注組織には土木の専門家のいることが多い。少なくとも仕組みの上では、発注者責任の追求を阻害するものはほとんどないだろう。投資判断が神の見えざる手とごくごく直接的な関わりを持ちほしないのだから。むしろそこに土木分野の今日的な悩ましさがあるものと想像する。

建築でも公共事業が明らかに先導的な役割を担った時代があった。その時代には、土木と同じように、公共の発注組織に建築設計等の専門家が多数籍を置き、時代の先駆けとなるような建築を次々に生み出していた。私が学生だった七〇年代ですら、大学の設計教育の中心は公共施設であった。しかし今は違う。神の見えざる手との付き合い方こそが焦点になっている。

昨今、リノベーションまちづくりの世界を中心に、算盤と志の両立、パブリックマインドを持つた民間という新しい掛け声が聞こえるようになった。ひよっとすると、土木的な感覚と建築的な感覚は、相補う形でそうした方向に双方の未来を見出していくのかもしれない。

そんな未来。今年の私の初夢と言っておこう。